

今、生かされている者の使命は？

— 「近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅」 参加して —

打田 茉莉

昨夏のヨルダン行きは、何年か前からの日本聖公会東京教区と中東聖公会エルサレム教区との交流の結果、アンマンにイスラエルはじめ周辺国からパレスチナ人クリスチャンが集ってイスラエル占領下の彼女たちの現状を知るというもので、以前から予定していたことだった。

ところが今年の私に起きたことは、以前から計画していたことではなく、私の予定が空いているところにちょうどある企画に乗せていただき、重いテーマに次々と出会ったということになった。3月、アウシュヴィッツはじめ中央欧州のホロコーストの跡を巡る旅に参加した。同行者の中には、東京大空襲の罹災者に国が何の補償もしていないことを訴える原告団の方や、戦争と医師の倫理の調査研究をしていらっしゃる大学の先生も。まず到着したウイーンの大通りで出会ったのは、中国の不当な支配を訴えるチベットの人たちのデモ。アウシュヴィッツ等では、ドイツ人の若者もユダヤ人の若者も見学していた。

そして6月初め、ある集まりで映画「おくりびと」の原作者青木新門氏の講演を聴いた。氏は死んだ弟を背負った直立不動の広島の子供の写真を広げ、この写真を見たとき自分と同じだと涙が溢れたという。敗戦時、満州にいた青木少年の父はシベリアに連行され、母親はチフスに罹って隔離され、亡くなった妹を背負って大人たちが死体を焼いているところに行っていっしょに焼いてもらったという。

さらに6月23日の沖縄慰霊の日の前に日本聖公会の企画で沖縄に行った。大浦湾の自然環境を守ろうと辺野古の海岸で米軍基地建設反対の座りこみを1889日も続けている人たちと座った。旧陸軍病院の壕や海軍司令部が入っていたという壕も入ってみたが、これらは観光客が入っても危なくないようにかなり作り変えられていた。次々と飛び立つ米軍機の爆音は現実だった。旅客機とは音が違いますねという友人がいた。

ある日、神保町を歩いていて映画を見る時間があると思い、岩波ホールに行ったところ、「嗚呼、満蒙開拓団」が始まる場所だった。会場にあったこの旅行のチラシを見て、早速電話した。今まであまりに知らないままだったことが有り過ぎるという思いだった。

8月は毎年、野尻高原大学村で過ごしているが、今年は何年ぶりかで岡田裕之先生にお会いした。長年かかわっていらした「わだつみ会」のお仕事から「くわだつみのこえ」を聴く「日本戦没学生思想」という書物を執筆され、法政大学出版局から今年7月に出された。また、そこで、西山勝夫先生から『「15年戦争」への日本の医学医療の負担の解明について』という「社会医学研究」誌に掲載予定の論文のゲラ刷りのコピーをいただき、九州大学医学部「生体解剖」事件や731部隊がやったことと戦後はGHQとの取引で免責されていることなどのお話を聴き、「戦争と医の倫理」の検証を進める会の設立にお忙しいとうかがった。

今回の旅行では、その「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」や遺跡を直接見ることができたし、個人ではとても行けない所までいろいろ回っていただいたうえ、皆様からの経験談も貴重だった。龍井の公園で日本語で話かけてきた80歳過ぎの朱相仁さんから日本名は新安英男と聴き、創氏改名や日本語教育は旧満州の朝鮮族にまで及んでいたことを知った。現在の中国にとっては、朝鮮半島が2つの国に分かれていた方が好都合という。半島の人たちと中国東部にいる朝鮮族が一つになれば、チベット族やウイグル族と中国政府との間に今起きているようなことになるのを恐れているらしい。千何百年もの昔から漢字を共通に使う東アジア文化圏があった。20世紀はそうした伝統の破壊どころかずいぶんとひどいことをしてどれだけ多くの人々が殺されたかしのれない。長距離のバス旅行の車窓から広く続く田畑を眺めたり、どんどん延びている高速道路工事、凶們で国境を越えて粗鉄を積んだ北朝鮮のトラックが入ってくるのを偶然見たり、結婚式の飾り立てた車の列に遭ったり、ロシア国境の綏芬河駅では中国にショッピングに来て帰るロシア人たちを見たり、とにかく平和が続いて人々が安心して暮らしている風景だったのはうれしい。これからの中国のことも学ぶ旅だった。

帰京して、早速、調布の市立図書館へ行ったところ、敗戦後を外地で過ごした人たちに関する本を特別に集めたコーナーがあった。シベリア抑留や満蒙開拓団関連のものが多かった。「従軍看護婦たちの大東亜戦争」の最後の章に「ダモイは遠くーシベリア抑留」という佳木斯第一陸軍病院勤務者の記録があったのでコピーをとり、佳木斯で中学時代を過ごされ、同じ旅をした酒井旭さんに送った。そして「姉が行動を共にした部隊に違いありません。この方たちが、シベリアの収容所で医療行為に従事していたとの記述にはホット致しました。最悪の生活ではなかったことが確認され救われた思いです。」というお手紙をいただいた。

(うちだ・まり：法務技官(心理)として少年鑑別所、少年院、刑務所、婦人補導院などに勤務し、戦争で運命が変わってしまった人々、その時代の社会の問題を反映している人々に遭う。1996～2005 家事調停委員。現在は日本聖公会信徒として東京教区人権委員長)